

News Letter 第1号

2011年9月1日発行

発行人 本部長 主教 加藤博道

編集人 事務局長 司祭 中村 淳



いっしょに歩こう!
プロジェクト

日本聖公会東日本大震災被災者支援



わたしたちは、東日本大震災により困難を負って生きる人々に敬意を払っていっしょに歩きます。

わたしたちは、被災地の方々の生活と地域の再創造に向けていっしょに歩きます。

わたしたちは、主イエス・キリストが、共に歩いてくださることに励まされていっしょに歩きます。

いっしょに歩こう!プロジェクトの願い

いっしょに歩こう!プロジェクト
運営委員 司祭 野村 潔

東日本大震災から2か月近くを過ぎた4月29日、日本聖公会では、「いっしょに歩こう!プロジェクト」を設立し、活動を開始しました。プロジェクト発足以来、未だ緊急事態が続くなかで、スタッフ、ボランティアをはじめ多くの方々が、まさに献身的に走り続けてきました。その結果、多くの被災者との出会いが与えられ、また様々な人々との関わりが広がってきました。その出会いの豊かさと人々との温かい交わりによって多くの恵みを与えられましたことを本当に感謝しております。

プロジェクトが走り続けてきた約3か月間、なかなかタイムリーな情報を提供することができませんでした。それは、もちろん、震災による被害の甚大さのゆえに、日々、起こりくる出来事に対応するだけで精一杯であったという事情もあります。また、すべてにおいて初めて経験する事ばかりのことに圧倒されてきたという事情もあります。しかし、それだけではなく、プロジェクトが行ってきた丁寧な関わり方のゆえに、情報を提供するに至るまで多くの時間を費やさざるを得なかったということが最も大きな理由でした。

プロジェクトの活動は、すでに各教会宛に配布させていただいた活動方針(ミッションステートメント)に基づいて行われていますが、それに加えて下記のような点を、いつも心がけながら支援活動の内容を考え、実施してきました。そのことを、ぜひ、皆さんと共有し、この活動を聖公会の宣教において意味あるものとしてまいりたいと願っております。

「いっしょに歩こう!プロジェクト」は、

- 1、社会的に弱い立場に置かれている人々、殊にお年寄り、子どもたち、障がい者、外国人などへの関わりを大切にしたいと願っています。
- 2、いつも行政や他団体の支援が届かない人々を心に留めたいと願っています。
- 3、人とのつながり、活動の必然性、物語性を大切にしたいと思います。プロジェクトの働きをより深く理解していただくため、説得力のある活動をめざします。
- 4、被災した人々、殊に東北教区の人々の思いを聴きながら歩みます。この活動は日本聖公会全体の取り組みとして行っていますが、常に東北教区の方々の思い、また東北地方が辿ってきた歴史や社会的背景なども心に留めたいと願っています。

おそらく、今、仙台を訪れた人は、何事もなかったかのような街の様子に驚かれるでしょう。しかし、5月末に開設したプロジェクトのオフィスでは、7月中旬にようやくインターネットがつながるようになりました。また現在、ボランティアの宿舎として用いている青葉静修館のトイレやシャワーの整備が、先日、ようやく終了しました。発注から2か月後のことです。オフィスの卓上電話も、8月初めまで1台しかありませんでした。余震も続いています。ひとつひとつのことが、決して通常通りではなく、未だ被災中であると言えると思います。また、原発事故による放射能汚染の問題は、常にストレスです。放射線量の数値に翻弄されている日々が続いています。

このような、これまで誰も経験したことのないような災害に直面し、先の見えない不安に苛まれている人々と、私たちはどのようにいっしょに歩くことができるのでしょうか? 私たちに求められていることは、決して支援する側の必要や論理ではなく、被災した方々の、複雑で繊細な心情と立場を可能な限り慮り、そして、可能な限り丁寧な関わりを紡ぎながら歩むことだと思います。今後、できる限りニュースやHPなどを通して、そのような歩みをお伝えしてまいりたいと願っています。皆様のご理解とご支援を心からお願い申し上げます。

写真で追う東北教区とプロジェクトの動き



2011年3月11日 宮城県仙台市宮城野区蒲生 仙台基督教会の信徒撮影

3月11日(金)

この日の午後2時46分、マグニチュード 9.0 という烈震が東日本を襲いました。揺れは5分以上も続き、その最中に東北地方全域が停電となりました。電話も通ぜず、ラジオだけが頼りの状態が2日間続き、何が起きているのか被災地の人間は正確に掴めない中で、不安な暗闇の二夜を過ごさなければなりませんでした。



災害対策本部設置

3月15日(火)

仙台基督教会に東北教区災害対策本部が設置され、まず着手されたのは各地の教会の状況確認と信徒の安否確認でした。しかし電話も思うように通ぜず、車の燃料も調達困難で思うように情報が収集できない中で不安ばかりがつのりました。ことに被害が大きいと伝えられている釜石、磯山が心配されていたところ、残念なことに磯山の信徒1名の死亡、2名の行方不明が確認され、その他沿岸部にお住まいの方の被災も伝わる中、原発事故の被害が小名浜にも広がりはじめていました。

3月18日(金)

燃料不足、高速道路不通という、東北に近づくことが困難な中で、中部教区よりの緊急車両が新潟、山形経由で仙台に援助物資を運んでくださいました。管区総主事、宣教主事も新潟から同行くださいました。相変わらず車の燃料は入手困難でしたが、仙台の信徒有志が自転車を使い、かなり遠方の高齢信徒、被災信徒宅に物資を届けてくれました。まだ水道、ガスが不通の地域が多く、米、水など重い物資を、まだ雪がちらつく中懸命に運んでくれました。



最初の支援物資到着



最初の支援物資配布(1)



最初の支援物資配布(2)

3月21日(月)

19日に神戸教区から緊急車両許可を取った車が来仙し、それを1週間の予定でお借りできることになりました。緊急車両は燃料を優先的に入れることができ、一般車両は通行止めの高速道路も通行できます。早速仙台の林司祭、李司祭、信徒有志が支援物資を積み込み、遠方で訪ねることが困難だった石巻市、東松島市、七ヶ浜町、新地町、名取市などの被災した信徒宅、避難所を中心に訪問を開始しました。その中で見てきた災害の深刻さと広大な被災地域。メディアの情報通り、新地町の磯山聖ヨハネ教会がある地区はほぼ壊滅状態で、地形も一変し、どうにか原形をとどめている家が数軒のみという状況でした。東松島市の信徒宅は1階部分が津波に貫かれ、避難先から戻ってみると2階部分が荒らされ、ものが無くなるという二次被害にあっていました。私たちの力でどのくらいのことができるのかという、漠然とした不安が広がっていました。そんな中で植松首座主教が来仙、他教区からも応援の人員や援助物資が届き、支えられているという心強さの中でこれからの働きへの模索が始まりました。



仙台オフィス開所礼拝

4月29日(金)プロジェクト発足

5月6日(金)仙台オフィス開所礼拝

大きな被害を受けた被災地の多くが東北教区内に位置していますが、この広大な被災地への働きは日本聖公会全体で当たることが決定され、「いっしょに歩こうプロジェクト」がこの日発足しました。災害対策本部改め「東北教区支援室」も共に歩むこととなりました。この時点ではまだ東北教区会館の一角に机・機材を置いての活動でしたが、活動の体制を整えるために中村宣教主事が来仙し、ボランティアも数多く与えられ、信徒への働きから繋がった人たちが、地域への働きも増えていきました。

震災3ヶ月記念礼拝



6月11日(土)

この日は震災がなければ東北教区宣教120年の礼拝が行われ、植松首座主教はその説教を勤めてくださるはずでした。

175名の参列者の前で植松主教はご自身の苦悩と共に、「この時が東北教区宣教120年であることに変わりはない。ここから新しい出発をすべき」と激励してくださいました。この礼拝の中では、すべての震災犠牲者、被災者の方々のため、勤務していた幼稚園の園児を救出する中で亡くなられた磯山の姉妹のためにも、祈りが捧げられ、ご家族、ご親族と共に勤務園の園長、職員の方も参列されました。



信徒 3 名の葬送式(1)



信徒 3 名の葬送式(2)

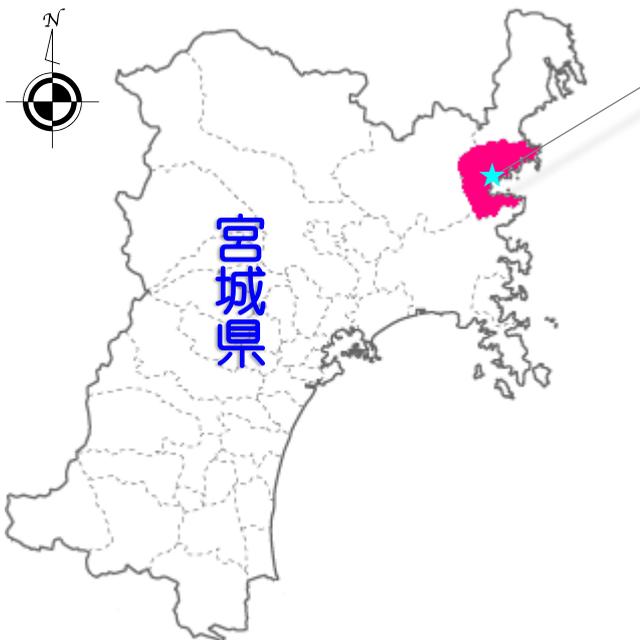
7月22日(金)

行方不明であった、2名の磯山聖ヨハネ教会信徒の死亡が確認され、震災当日に亡くなられた信徒(このお三方はご家族)と共に葬送式が相馬市の葬祭会館で行われ、磯山、郡山、仙台の信徒を含め250名近くの方がご参列くださいました。愛された聖堂が被災し、使うことができなかったことが残念でした。

今現在進行中のプログラムについて

現在、プロジェクトがかかわらせていただいている被災地域は、北は岩手県釜石市から南は福島県いわき市小名浜までの広範囲にわたっています。8月11日には釜石神愛教会・幼児学園をベースとしていた働きに新拠点が与えられ、小名浜での働きも再開に向けて準備中です。南三陸町志津川地区では在日外国人の人たちへの日本語学習支援、夏休み中の子どもたちへの学習支援、当地のおもちゃの図書館「いそひよ」との協働などの働きが開始されています。名取市の仮設での買い物ツアーなど各地の仮設住宅での働きも地道に継続中です。これからも地道で息の長い活動を続けていきます。

外国人被災者支援 志津川プログラム報告 ～在日フィリピン人女性への日本語学習支援～



地名：宮城県本吉郡南三陸町志津川

来歴：2005年10月1日に、旧志津川町と旧歌津町が新設合併し、南三陸町が誕生。

情報：南三陸町は、東は太平洋に面し、三方を山に囲まれており、海山が一体となって豊かな自然環境を形成。また、沿岸部はリアス式海岸特有の豊かな景観を有し、南三陸金華山国定公園の一角をなす。

2011年2月時点の南三陸町全体の人口は17,666人(5,362世帯)で、その内志津川地区の人口は8,213人(2,723世帯)と、町のおよそ半数を占める。地震と津波で亡くなった方は町全体で540人以上、未だ行方不明の方が660人以上、避難者は2400人以上(2011年8月時点)。

南三陸の海は、親潮と黒潮の合流地点のため美味しい海の幸の宝庫として全国的にも有名。しかし、今回の津波で町の基幹産業が大打撃を受けた。

第1回 7月9日(土) タイムスケジュール

- 09:20 仙台事務所出発
 ・山崎パン 250 個
 ・支援物資(衣類・洗剤・衛生用品・お菓子等)
 ・テーブル 4 台、椅子 12 脚
 を車に積載
- 11:30 志津川到着
 12:30 開催場所のプレハブに荷物を搬入
 13:00 建物の祝福、スタッフの紹介、自己紹介
 13:30 グループの目標と流れを説明し、名称を決定
 14:00 【母グループ】日本語レベルチェック、名前練習
 【子グループ】ペンケース作り
- 15:10 トイレ休憩
 15:30 フィリピン医療団による相談会
 16:20 筆入れ贈呈式(母、子合流)
 16:30 聖餐式
 17:00 閉会、片付け
- <参加者 大人6人、子供4人、スタッフ9人>



プレハブの祝福式



スタッフ紹介&自己紹介

会場のプレハブが同行の教役者によって祝福され、お祈りの内に第1回志津川プログラムは始まりました。学習グループの名前は「サンパギータ・ザ・ファイティング・レイディーズ(=闘う女性たち)」。何やら勇ましい名前ですが、彼女たちの日本語の習得に対する決意の程がうかがわれます。ちなみに、「サンパギータ」とはフィリピンの国花で、甘い香りのする小さな白い花のことです。

この日は1回目ということもあり、学習会というよりは、むしろ仲間づくりと今後に向けたオリエンテーションが主な内容になりました。カリキュラムを作る今後の参考に、読み書きの力を知るための個別面談から始まり、ひらがな、カタカナ、漢字の練習や自分の名前を書く練習はしましたが、本格的な学習は来週以降です。

この日のハイライトは、お母さんたちが勉強をしている間に、子どもたちが一針一針縫ったフェルトの「ペンケース」の贈呈式です。「お母さん、頑張って続けてね」といながら渡されたサプライズ・プレゼントに、目頭を熱くするお母さんもいました。

この活動を通して、彼女たちが心から牧会を望んでいるということにも気づかされました。フィリピンでは国民の約83%がカトリックの信徒で、彼女たちも例外ではありません。しかし、近くにカトリック教会がないこと、嫁ぎ先が他宗教であることなどから、定期的に教会に行ける環境にはありません。そこで、毎週土曜日の学習会は、お祈りで始まり、お祈りで終わりたい、そして教役者が同行して下さる時はできるだけ聖餐式をお願いしたいと考えています。

聖餐式終了後、複数の人から「心が落ち着いた」との感想を貰いました。また、中村淳司祭が一人ひとり、子どもの祝福をされている姿を見ていたお母さんたちの満ち足りた顔を、私は忘れることができません。



日本語学習の様子



ペンケース作り



聖餐式(祝福)



Q1 なぜ、志津川のフィリピン人女性とその家族の支援をすることになったのですか？

A1 次頁にもある通り、本プロジェクトの活動方針の一つに「震災被災者の内、特に困難の中にある方々に思いを寄せて活動を行います(高齢者、こども、障がい者、在留外国人、貧困層、難民・・・)」とあります。この方針に沿って在留外国人の被災状況や、私たちに何が出来るのかを知るための調査を開始したところ、被災直後(3月15日現在)の岩手県、宮城県、福島県の外国人登録者数は、それぞれ6,077人、15,620人、11,085人で、国籍別には多い順に中国、韓国、フィリピンでした(法務省HP3月より)。この中には、お嫁さん不足に悩む農村や漁村に、自治体や仲介業者のあっせん嫁いできた女性も少なくありません。

この調査を通して、各地でいろいろな国の人に出会い、最初の活動として、宮城県南三陸町志津川に暮らすフィリピン人女性とその家族の支援をすることにしました。彼らも家屋や漁船、稼業のお弁当屋が根こそぎ流され、夫の実家や友人の家に身を寄せて暮らしています。

また、志津川は、震災前から東北教区が永きに亘り支援をし、また、被災後もその復興を支援している「おもちゃ図書館・いそひよ」がある地域であることもあって、最初の支援地となりました。



Q2 なぜ、日本語習得の支援なのですか？

A2 6月25日に、主だった4人のフィリピン人女性から、支援に対する要望を聞いたところ、先ず出されたのが、日本語を習いたいというものでした。皆、とても流暢に話せますが、読み書きが不得意だからです。ある程度の力がついたら、将来に向け介護ヘルパーの資格を取りたいとの具体的な目標も持っています。震災直後、言葉の壁によつて的確な情報が得られず、とても不安な日々を過ごしたことも動機の一つです。話し合いの結果、毎週土曜日の午後1時～5時に、介護ヘルパーの資格取得につながるような日本語の学習をしようということになりました。



Q3 他にはどんな支援をするのですか？

A3 日本語学習と同時に、彼女たちが連れてくる子どもたちのためのプログラムも行うことにしました。土曜日以外にも、小中学生を対象にした学習支援の要望もあり、こちらは月曜日と水曜日の午前中に、夏休みの宿題を中心に行うことにしました。

また、被災した人の多くが避難所や仮設住宅に入らなかったため、支援物資が届かない状況にあることもわかり、物資の支援もすることにしました。

報告者：「いっしょに歩こう！プロジェクト」運営委員 池住 圭

志津川プログラム 担当スタッフ紹介



池住 圭
中部教区
外国人支援担当



千葉 礼子
ひかりおもちゃ図書館
日本語指導担当



福澤 眞紀子
東京教区
日本語・子ども担当



高木 泉
北海道教区
コーディネーター



山本 尚生
九州教区
子ども担当

※「いっしょに歩こう！プロジェクト」News Letter 第1号は8ページ構成となりましたが、第2号以降は原則として4ページ構成とし、プログラムごとの特集を中心とした内容で、毎月1回の発行を予定しております。

日本聖公会東日本大震災被災者支援活動方針 (ミッションステートメント)

名称

「いっしょに歩こう！プロジェクト」～日本聖公会東日本大震災被災者支援～

スローガン

- ①わたしたちは、東日本大震災により困難を負って生きる人々に敬意を払っていっしょに歩きます。
- ②わたしたちは、被災地の方々の生活と地域の再創造に向けていっしょに歩きます。
- ③わたしたちは、主イエス・キリストが、共に歩いてくださることに励まされていっしょに歩きます。

活動方針

- ① 災被災者の内、特に困難の中にある方々に思いを寄せて活動を行います。
(高齢者・子ども・障がい者・在日外国人・貧困層・避難民・・・)
- ②原発事故とその影響について、深い関心を持ち、情報を収集・発信し、国内外に対し責任ある活動を行います。
- ③全国及び世界の聖公会から祈りと共に捧げられた献金を用いて活動を行います。被災状況や活動報告などの広報活動を通して、その祈りと支援に応答いたします。
- ④被災地に活動拠点を置き、仙台に支援オフィスを設けて活動を行います。また、専任のスタッフを採用し、ボランティアを募ります。
- ⑤聖公会関連学校・諸施設また他教派の方々と連携して活動を行います。
- ⑥地震により被災した信徒の支援、被災教会・施設の再建に向けて活動を行います。
- ⑦被災教区をはじめ全教区と協働して、日本聖公会全体の働きとして活動を行います。

体制・役割

- ①日本聖公会に「『いっしょに歩こう！プロジェクト』～日本聖公会東日本大震災被災者支援～」を設置します。プロジェクト事務局は、仙台オフィスに置きます。
- ②このプロジェクトに運営委員会を設置し、プロジェクトの運営全般を行います。
- ③このプロジェクトに事務局長をはじめスタッフ数名を採用し、ボランティアと共に仙台オフィスをはじめ被災地での支援活動を行います。
- ④このプロジェクトは、管区事務所のスタッフの協力を得て、広報・渉外・経理などを行います。
- ⑤このプロジェクトは、聖公会における被災者支援の働きのために捧げられた献金・募金を管理し、その使途に関して責任を負います。

組織・構成

運営委員 首座主教 植松 誠(北海道教区・委員長)
司祭 中村 淳(東京教区・管区宣教主事・事務局長)
司祭 相澤牧人(管区事務所総主事)、池住 圭(中部教区)、
司祭 大町信也(北海道教区)、主教 加藤博道(東北教区・本部長)、
司祭 笹森田鶴(東京教区)、主教 中村 豊(神戸教区)、
司祭 野村 潔(中部教区)、司祭 長谷川清純(東北教区・プログラムディレクター)、
村井恵子(横浜教区・日本聖公会婦人会長)
現地スタッフ数名

「いっしょに歩こう！プロジェクト」事務局
【open】月～金 10:00～17:00 【close】土・日・祝
〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町 3-4-5 クライスビル 2F
TEL:022-265-5221 FAX:022-748-5321
E-mail:walk@nssk.org URL:http://www.nssk.org/walk/

